

# 水無瀬

ワキ 高野の僧（為世）

子二人 姉と弟

シテ 子の亡母

季は 地は 摂津  
秋

「是は高野山より出でたる僧にて候。我いにしへは津の国水無瀬の里に。為世といはれし者にて候ふが。さる子細候ひて元結切り。かやうの姿と罷りなりて候。次第に故郷もなつかしう候ふ程に。唯今思ひ立ち水無瀬の里へと急ぎ候。是はゝや故郷水無瀬の里に着きて候。此所に暫く休まばやと思ひ候。

子二人一声

「花散りし。嵐も寒き秋風に。もろき柞の森の露。

消えても残る命かな。

姉  
「是は津の国水無瀬の里に。為世の卿といはれし人の。二人の子にて候ふなり。

二人  
「さても我父後の世の。為世は遁世し給ひて。母も我等も捨小舟の。水無瀬の川の小夜千鳥。共音に鳴きて過せしに。母さへ空しくなり給ひて。我等おとゞひ花水を。手向の為めに立ち出づる。

歌  
「かほどまで。便りなき身を我父の。く。捨て置

き給ふ思ひ子の。恋ひ悲しめるあはれさよ。人は  
帰らで見る夢の。別れとゞまる物ならば。現に逢  
はんよしもがな。／＼。

ワキ詞  
「不思議やな是なる幼き者を見れば。古の某が子にて候。さらぬ様にて過ぎ行かばやと思ひ候。

弟  
「いかに姉上。聖の御通り候ふ御留め候へ。

姉  
「実によく仰せ候ふ御留め候へ。

二人  
「いかに御聖聞し召せ。往来の利益の御為めならば。

我等が母の空しき跡。弔ひてたばせ給へなふ。

ワキ  
「無慙やな父とも知らずおとゞひは。利益をなさんと往来の。僧を供養し給ふぞや。さらば留まり申すべし。

二人  
「嬉しや今日は母上の。空しき跡の其日なり。御経読みてたび給へ。

ワキ  
「それこそ易き御事なれど。落つる涙を押さへつゝ。  
御経を読まんと志せば。

二人 「我等が母の亡き跡を。弔ひ給ふ御聖を。

ワキ 「父とも知らで。

二人 「今は又。

地 「よそのあはれに言ひなして。く。さらば留まりて。跡を弔らひ申さん。

二人 「嬉しの今の仰せやと。おとゞひ共に喜べば。

地 「見れば昔に変はりたる。庭の桂木窓の梅。主忘れぬしるしそと。匂ひを留めて吹く風の。洩る月影も冷ましや。見苦しけれど此方へと。御僧を請じ入れければ。

ワキ 「千度百度親子ぞと。

地 「名乗らばやとは思へども。輪廻の業の目を塞ぎ。念佛申し撫子の。弔ふ法の結縁に。正覚ならせ給へや。く。

ワキ 「南無幽靈成等正覺。

シテ 「念佛衆生無量寿如來。

ワキ 「一代教主釈迦牟尼法号。

シテ 「来迎引摶。

地 「あら有難や。

ワキ 「更闌け夜静かに帳門開かざるに。影の如くに見え  
給ふは。此世には亡き古人の。姿顕はし給へるか。

シテ 「恥かしや猶も輪廻に歸り来て。見え参らするは憚  
りなれども。親と名乗らで情なく。よそがまし  
げにおはします。恨み申しに参りたり。

ワキ 「尤それはさる事なれども。捨つる浮世の身を恥ぢ  
て。親と名乗らぬばかりなり。

シテ 「なふ包むも事による物をと。亡者は子供の手を取  
りて。

ワキ 「草の枕の夜の宿。

シテ 「夢に相逢ふ親と子の。

子二人 「袂にすがれば。

ワキ 「兎も角も。

地 「争ひかねて捨人は。いとゞ心の迷ひ子に。親と名乗らんは。よその人目もいかならん。

シテ 「羨ましや父も子も。

地 「同じ浮世の身にあれば。逢瀬の便もあるぞかし。我は冥途に帰りなば。いつ又夢にも逢ふべき。

地 「縁子は三界の。く。首かせに繫がれて。娑婆にも行かれず冥途にも。帰りかねて悲しやな。苦しみは受くれども。忘るゝ隙なきは。娑婆に残る妾ゑ左右に引き分けて。立つも立たれず居るも居られぬ。因果の車の廻り来て。問へども何かは答ふべき。叫べども叶はず。

シテ 「されどもかやうの弔ひに。

地 「されどもかやうの弔ひに。今こそ親子に鸚鵡の袖を。振り切りがたき糸竹の。紫雲たなびき音楽聞

え。紫雲たなびき 音楽聞えて。成仏することぞ有  
難けれ。成仏するぞ有難き。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「譜曲評釈 第八輯」大和田建樹著